二　盆踊り復活

「こんにちは」

　中垣は努めて明るく振舞った。初めて訪問した家だ。隣には、コミセンの事務局長の木本さんがいる。だが、相手はこちらをいかにも胡散臭そうに見ている。もし、木本さんがいなければ、それこそ、石もて追われるような雰囲気だ。

　本来ならば、わざわざ自宅まで訪問せずに、回覧板かなんかで周知すればよいのだろう。だが、ほとんどの住民は中身を見ずに、サインか印鑑を押すだけで、はい、お隣りへ、はい、お隣りへ、と回覧板の滞在時間をいかに短くして、自治会の中で一番先に回覧を終えることに喜びを感じているような行動をしているので、回覧板では周知したことにならないのだった。

　実際に、これまでも、総会など、出席者の定数が必要な大事な会でも、回覧板だけではほとんどの人が集まらずに、一軒、一軒、該当する家や役員に連絡したり、訪問したりしてきた。

　こうしたことから、今回の盆踊りの復活も、回覧板を回すとともに、こうして、わざわざ、いや、効果的に家を訪問して案内することにしたのだった。

「実は、今度、盆踊りを復活しようと考えているんです」

　木本さんが話を切り出した。

「盆踊りの復活？なんじゃそれは」

　案の定、この家の住人、大島さんは首をひねっている。

「久しぶりに、街おこしの一環で、盆踊りを踊ることになったんですよ。確か、回覧板で回していたとは思いますけど。目立たなかったなあ」

　木本さん頭を掻いている。決して、相手に非があるようには言わない。

「ふーん。それで、その盆踊りがどうしたんだ」

　相手が話に乗ってきた。今がチャンスだ。

「いやあ。その盆踊りを今年、復活しようと考えているんです。大島さんも昔、踊ったことがあるでしょう」

　大島さんの目が一瞬、どこか遠くの方を見た。そして、再び、現実の視線に戻った。

「まあ、茶でもしばきまい」

　中島さんは奥から麦茶を三つ運んできた。

「それで、そこの、見かけない若い奴は誰じゃ」

「ああ、彼ですか。先ほど、話をしたように、街おこしの一環で、盆踊りを復活しようと考えているんですけど、中島さんもご存知の通り、このコミセン活動の参加者は年配の人が多いので、地域の若者たちにボランティアを募集したんです。そうしたら、彼、中垣さんが応募してくれたんです」

　木本さんが嬉しそうに中垣を紹介した。中垣が慌てて頭を下げた。

「ふーん。そうか」

　大島さんは、もう、八十歳になろうとしている。盆踊りが開催される神社の一番近くに住んでおり、盆踊りの開催場所となる広場の管理なども行っている。中島さんの協力がなくては、盆踊りの開催は難しい。まずは、核になる人を、中心人物を口説かないといけないのだ。

「ぜひ、大島さんも踊ってくださいよ」

　木本さんが両手を上げ、おどけながら盆踊りを踊る真似をする。

「ふん。まあ、がんばってや」

　大島さんは皮膚にこびりついた残り少ない髪を禿げ上がった頭にしっかりと保存するかのように、更に、下着のシャツを揺らしながら、奥に引っ込んだ。中垣は木本さんの横顔を見た。その視線に気が付いたのか、中本さんも中垣の顔を見る。

「これは、ＯＫなんでしょうか。それとも、駄目なんでしょうか」

　中垣が不安そうに、眉をひそめながら尋ねた。

「ああ、大丈夫だよ。大島さんは口下手だから、はっきりとは言わないけれど、がんばってということは、了解してくれたということだよ」

　緊張していたはずの木本さんの顔が緩んだ。

「そうですか」

　中垣はいぶかりながらも、木本さんが言うことだから信用せざるをえない。

「さあ、次の家に行きましょう」

　木本さんは目の前の麦茶をぐいと飲み干すと座布団から立ち上がった。慌てて、立ち上がろうとする中垣。

「接角出していただいた麦茶だから、飲み干した方がいいよ」

「そうなんですか」

「同じ物を食べ、同じ物を飲むことが、相手の信頼を得ることにつながるんだよ」

「わかりました」

　中垣は木本さんを見習ってお茶をぐいと飲み干すと「ごちそうさまでした」と手を合わせ、席を立った。その後ろ姿をにやりと笑いながら、両手を上げ、「こうだったかなあ」と盆踊りを踊る中島さんがいた。

　次は、昔は、新興住宅地と呼ばれている地域を訪問した。この地域は、昔から住んではいないけれど、この市の人口が増えるにしたがって、電車の駅を中心に、乱開発されるように、田んぼが埋め立てられ、建売住宅等が建ち、ローンなどを利用してそれらの住宅を購入して住み始めた人たちだ。でも、その人たちも、子どもが成長し、大学入学や就職で家を出ていくとともに、自分たちも、定年か、またはそれに近い年齢になっている。中垣やその両親もそうした人たちに所属する。

　同じような家や同じような庭、同じような車が並んでいる。そのため、たまに、深夜まで飲み会

があり、酔っ払って帰った時なんか、家を間違えそうになったことがある。また、知らない路地は奥行きがわからず、Ｌ字型の道路を曲がると行き止まりになっていることもある。

「こんにちは」

　中垣と木本さんはその中の一軒を訪れた。たまたま、その家の主人らしき人が庭に出ていた。年の頃なら、六十歳前後だ。まさに、中垣の父親と同じ世代だ。だが、中垣の挨拶に対しても、その主人らしき人は、自分が声を掛けられたと思わなかったのか、返事どころか、こちらを向こうともしない。

「こんにちは」

　再度、声を掛けた。今度は、少し大きな声で。男性はようやく振り向いた。手にはスコップと鋏を持っている。庭木の剪定や草抜きでもしていたのだろうか。

「今度、盆踊り大会を復活するんです。回覧板でも回したんですけど、是非、お越しください」とチラシを差し出す。男性はじっとこちらを見ていたが、ああと頷くと、中垣の方に近づいてきた。

　男性はチラシを受け取ると、「ここに住んで、三十年になるけれど、盆踊りなんてあったのか。知らなかったよ」

「ええ。昔は盆踊りがあったんですが、今はやっていないんです。だから、今回、復活しようとすることになったんです」

「そうか。復活か。それはいいことだ。もう、私の年齢になるとあらゆることに復活が難しくなるからなあ」

「そんなことはないですよ。十分に若いですよ」

　木本は急に舌が回るようになった。相手が自分の父親の年齢に近いから安心したからだろうか。でも、家では、父親と話すことはほとんどない。ああ、おお、の感嘆符ぐらいだ。相手とは近すぎない関係の方が話は弾むのだろうか。

「ありがとう。それじゃあ、行ってみようか」と、復活しそうのない皺を更に増やして笑ってくれた。

「ええ。会場でお待ちしています」

　中垣は膝に顔がつかんばかりに頭を下げた。隣でも、木本さんも同じようにお辞儀をしている。

　その勢いで、隣の家で洗濯ものを干しているおばあさん？またはおばさん？にも声を掛ける。先ほど言ったように、中垣にとって、女性の年齢ぐらいわからないものはない。おばさんなのか、おばあちゃんなのか、その境界がわからないのだ。もちろん、若い女性とおばさんの境界を判断するのはもっと難しい。下手に判断して、お姉さんに向って「おばさん」とでも声を掛けようものならば、しっぺ返しは倍返し、十倍返しとなる。

　だから、表札で確認して、名字で声を掛けるのが無難なのだが、最近は、名字さえも個人情報となり、人に知られたくないのか、表札を掲げない家が多くなっている。

　もちろん、相手が男性だって、声の掛け方は難しい。だから、一般的には、無難に、男性には、何が主人かわからないけれど、ご主人さん、女性には、結婚しているかどうかに関わらず、奥さんと呼んでいる。

　だけど、中垣はまだ若いので、そうした呼び方に少し抵抗があるため、おはようございます、や、こんにちは、などの挨拶の言葉をから始めている。

「チラシ？なんか、特典でもあるの？消費税でも安くなるの？何か、もらえるの？盆踊り？そんなもの行ったことないわよ。あたしたちは、たまたまここに住んでいるだけよ。何で、そんなことにこだわらないといけないの。好きな人が勝手にやったらいいじゃないの。邪魔はしないわ。でも、税金を使うのはだめよ。あたしたちは認めていないんだから。まあ、気が向いたら行くわ。今、手が離せないの。ポストにでも入れといて」

　中垣の一言に十倍以上の言葉が一方的に返ってきた。何も言い返せない。頷くことさえできない。先ほどまで、盛り上がっていた中垣の意気込みは、線香花火にバケツの水がぶちまけられたぐらいに消沈した。それでも、何とか、木本さんと一緒に、古いけれど、新興住宅地への訪問を終えた。

　日を改め、最近、開発された地区に行く。まさに、ニュータウンと言われる住宅地は、先日行った地域とは異なり、住宅は新しく、人の趣味が異なるように、家は鉄筋コンクリートや鉄骨造りの洋風であったり、木造の和風であったり、色も、白、黒、黄色、緑色と虹色のようにカラフルで、家の形も素材も様々であった。逆に言えば、それぞれ個性が強い人々が住んでいるわけで

ある。その人たちが、みんなが一斉に集まるような盆踊り大会に参加をしてくれそうには思えなかった。

　それでも、声を掛けなくてはならない。

　二人は、道路に近い家に近づいた。すると、朝早いにも関わらず、玄関のドアが開き、男の子が飛び出てきた。手にはグローブとバットを持っている。すぐ後からも、先に飛び出てきた男の子よりも小さい男の子が続いて出てきた。靴はまだ履けていない。かかとを踏んづけたままだ。ペタンペタンと音がしている。手には自分の頭大くらいの大きさのサッカーボールを両手で抱えている。

「パパ、早く行こうよ」

「ママも」

「はいはい」

　子どもたちが振り返った後ろからは、大人の男性と女性が出てきた。手には大きなバッグを持っている。

　その時を見計らって、中垣が声を掛けた。

「おはようございます」

　だが、その声にも振り向かずに、家族は車に乗り込もうとする。

「すいません」

　再度の声掛けにようやく振り向いた。

「あの。今度、盆踊り大会が開催されるので、是非、参加していただきたく、チラシを持って来ました」

「ああ、何かで見ましたね。すいません。ちょっと忙しいので、ポストにでも入れておいてください」

　男性は言葉だけは大人の対応をしてくれたものの、気持ちはここにあらずだ。

「パパ、誰？」

「盆踊りがあるんだって」

「ゴレンジャーでも来るの」

「ただ、踊るだけだよ」

「じゃあ、つまんない」

「たこ焼きを売っているかもしれないよ」

「僕、ハンバーガーがいい」

「ピザがいい」

「うーん。それは売っていないかも」

「じゃあ、行かない」

「行かない」

　親子の会話が聞こえてくる。車はここに一刻もいたくないかのように駐車場から飛び出していった。二人は連れて行ってくれなかった。門番の犬のように取り残された。

「少しくらい、話を聞いてくれてもいいのに」

「仕方ないよ。今は、子どものことで精いっぱいなんだろう」

　木本さんは中垣が持っているチラシの束から一枚抜くとポストに入れた。

「ここに住んでいる人は、新興住宅の人以上に地域には関心がないんだよ。それでも、案内はしないとね。案内がないと「案内がないぞ」と怒る人が多いんだ。義務は果たさないけれど、権利は主張するからね」

　そう言いながらも、木本さんは、うなだれる中垣を置いて、「おはようございます。今度、盆

踊り大会があるので、是非、来てください」と声を掛け、チラシを渡し続けている。

「よし」

　中垣も唇をかみしめると、義務のように笑顔を作り、権利のようにチラシを配り続けた。

　本日のニュータウンでのチラシ配りは全て終えた。まだ、何軒も残っているものの、日を改め、再び、昔から地元にいる人を訪問することにした。地元の人は、盆踊りが復活されることに対し、ああ、それはいい、と喜ぶ人もいるし、参加する人はいるの？と訝る人もいた。それでも、是非、参加してくださいねと、念を押す。ただし、地元の人はほとんどが高齢者のため、祭りに見に来ても、一緒に踊るには難しそうに思えた。

　そんな中、山下さんの家を訪問した。山下さんは、もう九十歳近い、おばあさんだ。目は見えづらくなっているし、耳も聞こえづらい。会話もうまく噛み合わない。でも、昔から、ここに住んでいる。踊れなくても、見に来てくれればそれでいい。一人でも多くの人が来てくれればいい。その場にいてくれればいい。中垣は、最後にはそういう気持ちになった。

　木本さんと中垣は、山下さんに趣旨説明をして、是非、盆踊り大会に見に来てくださいと、お願いした。

「はあ」

　耳が遠いのか、山下さんには聞こえづらいみたいだ。

「盆踊りをやります」

　中垣は大きな口を開け、やまびこを呼ぶように口に両手をつけて叫んだ。

「お供えは水ようかんでいいですよ」

　耳だけでない。頭の中の方にも伝わっていないようだ。

「ぼ・ん・お・ど・り」

　一語一語をはっきりと伝える。これで、頭の芯にまで届くだろう。

「へえへえ。踊ればいいんですね」

　中垣の願いが伝わったのか、それまで、座布団に猫のようにくるまって座っていた山下さんは、急に立ち上がると、手を上に上げ、腰を振り、足を上げた。阿波踊りやよさこい踊り、ジルバに、タンゴに、ツイストが混じったような踊りだった。いいや、踊っているよりも、操り人形のように、まるで誰かに踊らされているようだ。山下さんに何かの憑き物が付いたのか。

「いや、山下さんなら踊らなくても、見来てくれるだけでいいんですよ」

　木本さんが座ったまま声を掛ける。万が一、踊っていて、足がもつれて倒れたりしたら、骨折など大けがをしてしまう。また、急な激しい運動で、心臓発作や脳いっ血などの恐れもある。それなのに、山下さんはまだ踊り続けている。また、山下さんは立ったままでも、背がちじんだのか、それとも、木本さんの座高が高いのか、山下さんと木本さんの視線は同じくらいだった。

「どうせ、踊るんだったら、昔からの踊りよりも、最近、流行りの踊りの方が、若い人が来てくれるよ」

　山下さんの踊りは、体が動かないのか、元々そういうふりつけなのか、手足がバラバラだったり、時には両手両足が同じ方向に動いていた。

「昔の盆踊りじゃないと、地域の人が怒りませんか」

「怒らん。怒らん。昔ながらの盆踊りと今流行の踊りと交代で音楽を流して踊ればいいんじゃないの。それ、あんたも若いんだから、踊らなそんそん」

　積極的になった山下さんが中垣の手を握った。

「若い人の手を握るのは久しぶりじゃ」

　山下さんと中垣の目と目が見つめあう。思わず目をそらす中垣。その代わり、中垣は木本さんの顔を見る。木本さんが首を縦に振った。出されたお茶は飲み干せ、と目くばせをしている。

　中垣はしぶしぶ立ち上がって、山下さんの側に立って、それこそ、山下さん以上にぎこちない動きで、隣で体を動かす。ダンスなんて踊ったことはないのだ。

「山下さん。それじゃあ、どんな、曲がいいんですか」

　苦虫をつぶしたような顔の中垣の横で、木本さんが真剣に尋ねる。中垣は、そんなことを聞いても無駄だという顔をしている。

「そりゃあ、ダンシングヒーローじゃろ」

「ダンシングヒーロー？」

　中垣と木本さんの驚きの声がハーモニーと化した。

「ああ。起きるのよい子ちゅう歌手が、最近、歌っていたじゃろ」

　中垣と木本さんが顔を見合わせる。

「その歌、聞いたことがあります。歌手は荻野目洋子さんです。でも、今から、三十年以上も前じゃないですか」

「ほうで。あたしらからしたら、十年はあっと言う間やから、三十年はあっ、あっ、あっ、や。つい一分前のようなもんじゃ」

　山下さんはどこからか扇子を持ち出してきて、頭の上で扇子を振り回している。

「そうじゃ、そうじゃ。孫が昔、こうして踊っていたんじゃ。その孫も結婚して子供ができたから、わしにはひい孫がいるんじゃ」

　山下さんは、あいしているのに、かまってくれない、とまるで自分が家族から相手にされていないかのように微妙に歌詞を替えて歌っていた。

「ええっ。盆踊りでダンシングヒーローを踊るんですか」

　中垣は助けを求めるように木本さんの顔を見た。その木本さんは、何かを思いついたらしく、大きく頷いている。

「本気ですか。木本さん」

　中垣は山下さんのたわごとに大きく頷いている木本さんに向かって、踊りながら呟いた。その言葉にも気づかず、山下さんは天動説を語る人々のように、自分を惑星の中心にして、今夜だけ

なら、シンデレラガール、十二時過ぎてもかぼちゃの馬車は来ない、だから一晩中踊れる、とダンシングヒーローもどきの歌詞を歌いながら踊り続けていた。

「ありがとうございました」

　木本さんが頭を下げた。

「山下さんのおかげで、盆踊りを成功に導くヒントが得られました。早速、やってみます」

　木本さんが立ち上がると、中垣も踊りをやめ、山下さんの家を出ようとした。静かになったので、ふと、振り向くと、さっきまで踊っていたはずの山下さんが、それこそ、憑き物が落ちたように、座布団の上にちょこんと招き猫の貯金箱のように座っていた。

「さようなら」

　中垣と木本さんは別れのあいさつをした。

「昼ごはんはまだかいな」と、見当外れの答えが返ってきた。

「もう何軒回ったんですかね」

「うーん。まだ、百軒ぐらいですかね」

「後、何軒ですか」

「うーん。千軒ぐらいですかな」

「そうですか」

　中垣は続きの言葉を止め、空を見上げた。青い空に白い雲。何の変哲もない、見慣れた空だ。だけど、今見た空と昨日見た空は異なっているはずだし、数分後に訪れる空もまた、異なっているだろう。そうだ。その通りだ。大きな白い雲が、二つに割れ、それがさらに二つに割れ、無数に分かれた後、風に流され、どこかへ行ってしまった。もう、あの雲たちは、もう一つになることはないのだろうか。

「さあ、行きますか。一軒、一軒、つぶしていきましょう。数が減ることはあっても、増えることはありませんよ。大丈夫。マラソンと一緒です。一歩、一歩、前に進めば、ゴールは近づいて来ます」

　木本さんの声に中垣は我に返った。

「そうですね。雲のように、新たに発生するわけじゃないので、いつかは終わりますよね」

「雲がなにか？」

「いえ、いえ」

　中垣は、イベントの裏にこうした目に見えない作業があることを初めて知った。イベントの華やかさに魅かれて、ボランティアに参加したものの、実際は、苦労の連続だった。喜んで協力してくれる人、嫌々ながらでも参加してくれる人、無視する人、非難する人、まさに人それぞれだ。でも、木本さんが言う様に、一つずつ積み重ねていけば、やがて終わることも知った。

「とにかく、こちらから話すことです。理解してくれなくても、賛成が得られなくても、語り掛けることが大事なのです。そうしないと、俺に話をしてくれなかった、と入口のところで止まってしまいます。大変ですけど、全部、回りましょう」

　木本さんの口調はおだやかだけど、コンクリートの中に鉄筋が通ったような話ぶりだ。

「はい」

　中垣は大きく返事をすると、これまで、どちらかと言えば、木本さんに隠れて、後ろを引っ付いていたが、横に並んで、時には、前に出るようになった。

　こうして、中垣と木本さんのペアによる地域への盆踊りの周知及びチラシ配りはようやく終わった。

　だが、広報活動はこれだけでは終わらない。

　事務所に帰るとあて名書きだ。全戸訪問の際に、地域から出ていった息子や娘、孫たちなどの住所を聞いて、そうした人々に、十数年ぶりに盆踊り大会が開催されるので、お墓参りを兼ねて、参加しませんか、というはがきを送ることにしたのだ。

この時代、メールの方が手っ取り早いのだけれども、メールだと開封されずに、無視されたり、読まれなかったりする可能性が高い。やはり、紙の力は神に通じるとして、はがきを送ることにしたのだった。その数は千を超える。

だが、折角、はがきを送ったものの、半数以上は、あて先不明で返却された。最近は、携帯電話があるため、祖父や親にも転居をしても詳しい住所までは教えないのだろうか。多分、埼玉や群馬、栃木に住むことになっても、東京に転勤になったとか、一つの塊としてしか言わないのだろう。

それに、昨今、以前ほどではないけれど、市町村合併して、新たな町名が数多く生まれた。大きな岩を祭る神社があるから大岩だとか、大きな川沿いの集落で大川だとか、大きな平地があって大平だとか、水が豊富で田んぼが広がって大田だとか、新たに田んぼを切り開いたことで造田だとか、そこの場所の風景やそこの場所での人間の営みや歴史を地名にしていた。

だが、合併する際には、ひとつの呼び方にするために、住民にとっては割り切れない気持ちながらも、二つの地名を足して二で割ったような名前や、どこから持ってきたのか、これまでの地名とは全く違う、地域の実情を全く反映していないような名前になった都市もある。、失っていったのではないだろうか。新しい名前は、わかっていても気持ちがなじまいのだ。通じないのだ。

こうしたことなどもあって、中垣たちの、盆踊りの案内はがきも、一度も目を通されることなく捨てられたり、例え、読まれたりしても、自分のことではない、自分とは全く関係ないことのように、資源ごみの新聞紙と一緒に、月二回の収集日に回収された。そういう意味では、エコ活動の一環として、少しは人の役に立っているのかもしれない。ただし、郵便料金と比較しての効果効能は低いと言わざるを得なかった。